

# 昔なつかしの紙芝居を出前公演する

滋賀県大津市・テアトルネットワーク湖人の会

志瀬海社中

gravure

3





チヨーン、チヨンチヨン。  
「昔なつかしの紙芝居。十時から昭和会館で始まるよ」。

チヨーン、チヨンチヨン。

志滋海（しじみ）社中の藤本一也さんが、拍子木を鳴らしながら、公演直前に会場の周辺を呼び込みにまわる。

この日、滋賀県大津市の昭和会館で、スバル運動推進委員会主催の「伝統文化を通じて世代間交流をはかろう」に出前講座としてメンバー七人が参加し、紙芝居を上演する。演目は、「おおきくおおきく おおきくなあれ」「ある日の忠治」「平和への祈り」「よいしょ よいしょ」、クイズ紙芝居「おたのしみ」など新旧の作をおりませている。あわせて、水アメや駄菓子なども配られた。紙芝居仲間である「かっふるつかだ」の愛称で親しまれている塚田潤一さん、初子さん夫妻による影絵の紙芝居も上演された。半年ほど前に知り合った二つの紙芝居劇団は、ジョイント公演をすることもしばしばという。

昭和会館での公演を終えたメンバーは引き続き、京都市の京都文化芸術会館へと向かう。ここでは開催中の演劇フェスティバルの幕間にロビーで上演した。先ほどに加え、「黄金バット」や「鞍馬天狗」なども上演された。

上演中、興味深いのは、紙芝居を観る大人たち



の様子。前列にいる子どもたちよりも、むしろ真剣なまなざしで身を乗り出して観ている。そして、クイズ紙芝居で正解し、景品(?)を照れながらもらう。

志滋海社中が結成されたのは、平成十四年六月。もともとは、平成元年に、環境保全グループ、舞台芸術関係者などによって結成された「テアトルネットワーク湖人(うみんうど)の会」の紙芝居上演グループ。湖人の会では、琵琶湖とともに生きる人々の心意気を表現したミュージカル「近江のこたろう」を上演するなど、地域密着型の演劇、音楽活動を展開している。そんななか、紙芝居の貸し元が残した原画を、仲間の画家が保存していることが判明。「街角で上演されてこそ紙芝居の値打ちがある」と湖人の会では、復活上演を行なうことにした。早速、メンバーを募ったところ、十人ほどが名乗りをあげ、紙芝居の実演部隊としての志滋海社中の立ち上げとなった。社中では、絵の修復や裏書されている台詞の判読を行なうとともに、昭和初期の自転車を探し出し、駄菓子を入れる箱も特注した。また、大阪に住む、現役の紙芝居師鈴木常勝さんを招いての実技指導も受けた。

出前公演をはじめた当初は、「お声がかかるか」の一抹の不安もあったというが、たちまち、保育園、老人福祉施設、商店街などから公演依頼がひきもきらずに来るようになった。その回数は、こ



の二年間で、実に百三十回を超える。一日に二か所、三か所と掛け持ち公演もしばしばという。市内石山寺の門前で開かれる「牛玉さん」の市や保育園では、毎月、定例化している。「そろそろ上演するネタが尽きる。新しいものを覚えたいといけないあ」とは、藤本さんの言。日本国内だけでなく、お隣の韓国にも、昨年四月に七名が訪れた。おもに大学で上演。そのなかで、韓国の学生たちが自分たちで紙芝居をつくり、上演しているという。その様子を映したビデオも送られてきた。

社中の面々は、もともと演劇などの素地のある人たちが多い。メリハリをきかし、動作身振りで、聴衆を惹きつけるのはお手のものだが、鈴木さんと競演をしたときには、経験の差を痛感したという。今後とも、聴衆の気持ちを惹きつける技の習得に向け、お互いが研鑽を積むことにも余念がない。

これまで、原画の保管や修復作業は自宅で行なっていたが、今年から、新たに事務所も借り、それらの作業もしやすくなった。

紙芝居の醍醐味は街頭で演ずること。決まった場所にいけば紙芝居が観られる。そんな風景を創りたいと社中の面々は考えている。「人の集まるところに街頭紙芝居あり、街頭紙芝居あるところに人びとの交流が生まれる」と。

■連絡先

<http://www.cable-net.ne.jp/user/fk112270/>